作品

上前智祐

有史前より人類は星空を観賞してきた。いまも私は、星のテンテンで描かれたボウ大な画面を見ていると、人間社会のいろいろな出来ごとを忘れて優雅なふんいきにつつまれる。

ポツポツと降りはじめた大粒の雨は、乾いた地面から黒いトタン屋根にテンテンを描いていった。まもなく、薄暗くなった空間いっぱいに数万条の半透明な線を描き、さらに突風にあおられ、線は滝と化し、水しぶきをあげて屋根に落ちる思い。これは一粒一粒の雨が、数基の機関銃を一斉に射るがごとく、トタンを激しくたたく音。やがて風雨やんで夕日さし、外に出ると、道路上には大小の砂利がぎっしり顔をのぞかせていて、私の足を引止める。また茂った小さい木の葉からこぼれる露が黄金に光って、金魚屋の、かげった水槽へ落ちてきた。一面に赤いテンテンで群がっているうちの数匹が動揺し、一層鮮明さを増した。

人は点の価値に気づかなかった。私は文学的要素を否定することによってまず点を打った。

「朝日ジャーナル」1964 年 9 月 27 日号（表紙に油彩採用・寄稿文）掲載